

# 教職実践演習（幼・小）の報告

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 田 中 崇 教

## はじめに

本報告は、平成29年度「教職実践演習（幼・小）（以下、本科目）」（幼児教育コース対象）の概要とその省察を記したものである。本科目は、主として初等教育学科幼児教育コースの4年次生を対象に、教職・保育士養成課程の履修全体を通じて身につけるべき資質能力の涵養を様々なテーマ（内容）や形式（方法）で実施し、保育・教育の専門職者として求められる事項（①使命感・責任感・教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児・保護者理解、④保育指導力）の補完・向上をねらいとしている。

ただし、昨年度までとは異なる運営体制が今年度は敷かれることになった。そのため、「学生の確かな成長を実現するための効率的効果的な指導」の観点から授業内容構成について関係教員等（幼児教育コース関係教員、初等教育学科長ほか）と昨年度から協議を重ねていく必要があった。そこで確認された視点とは、①従来の内容を単純に削減するのではなく「適切な形で再構成」すること、②学生の必要に応じて「新たな内容を設定」すること、この二点であった。両者を通底する考え方として、学生の現時点での能力とその向上必要性を彼女ら自身が痛感するとともに、残された半年間の在学期間、すなわち本科目を通して、資質向上に自ら進んで、時には教員も巻き込みながら学生同士が話し合い・高めあうような雰囲気の醸成である。

以上の課題認識を念頭に、本科目は、新たな試みを積極的に盛り込みながら進めていった。

## 1 授業計画

全15回の授業は次の通りであった。すべて予定通りに実施された。

- |      |                                |
|------|--------------------------------|
| 第1回  | オリエンテーション—履修カルテ等の確認            |
| 第2回  | 実習の振り返り—今後の取り組みに関する演習          |
| 第3回  | 子育て支援に関する演習—支援者の立場から           |
| 第4回  | 模擬保育および検討会①—家族・地域、社会ルール、健康安全など |
| 第5回  | 模擬保育および検討会②—季節や年中行事など          |
| 第6回  | 現任保育者による講話・交流会①—幼稚園教諭          |
| 第7回  | 現任保育者による講話・交流会②—保育士            |
| 第8回  | 子育て支援（保育）に関する研修会等での実地演習        |
| 第9回  | 保護者理解（子育て支援）に関する演習—親の立場から      |
| 第10回 | 幼稚園・保育所等における実地演習①—子ども理解        |
| 第11回 | 幼稚園・保育所等における実地演習②—保育者の業務理解     |
| 第12回 | 幼稚園・保育所等における実地演習③—環境構成等        |
| 第13回 | 幼稚園・保育所等における実地演習④—設定保育         |
| 第14回 | 保育実践の事例分析に関する演習                |
| 第15回 | 保育・子育て支援の現況理解と今後の展望を踏まえた総括     |

## 2 平成29年度実施の特徴—将来の自己像を意識した構造的補完・向上プログラムの構築—

本科目は、平成25年度に開講され、以降必要に応じて改善の手が加えられてきた。昨年度からの継続的な取り組みに加え、今年度は授業運営計画立案の際、受講生（幼児教育コース4年次生および科目等履修生にて構成：54名）がこれまでに実施してきた幼稚園教育実習や保育実習等での評価・コメントを手がかりに、本科目での補完点と重視すべき方向性を確認した。これらは次の三点にまとめられる。

一点目は、模擬保育の実践・評価を通して学生自身が、未だ保育職者として発展途上の段階にあることを自覚し、資質向上への意欲を高めることである。3年次の6月と4年次の5月に幼稚園教育実習を、また3年次の8月と2月に保育実習を行った当該学生らは、その都度実習園職員らからの指導を受け設定保育案を立て、実践的保育力を磨いてきた。また、就職採用試験にて課せられる模擬保育でも本学教員から指導を受け、トレーニングを積み、合格を勝ち取っていてもいる。すなわち、彼女らの間には「能力向上のための研鑽を重ねてきた」と「(実習園からの評価や採用試験結果に基づき)一定の能力があると周囲から認められている」とことへの自信が芽生えている。このことは、一方で認めるべきであるが、他方で過信につながりやすく、注意しなければならない。実際に、園職員や様々な方々の温かいご指導・ご支援があって初めて成り立った設定保育(案)や保育実践であったことはいうまでもない。また、採用試験等による評価は、どちらかといえば「今後の成長可能性」といった期待値が含まれていることが多く、「現時点での即戦力保育職者として求められる資質能力の十分さ」のみとは必ずしも言い難い。重ねていえば、卒後の4月着任を迎えるまでに、資質向上への継続的な取り組みが不要な学生は皆無である。ところが、例年本科目で模擬保育を実施した際、資質向上への探求意欲の鈍りと捉えざるをえない行動や検討会での言辭がみられた。既知の教員や仲間内での活動であったり、2年次以降幾度となく実施してきた模擬保育であったりと原因は多面的にあげられる。「向上への意欲」を駆り立てるモチベーション要素が本科目模擬保育活動内に見いだされにくくなっているとの指摘があげられる。

そこで、今年度は保育案立案以降発表までのすべての作業について学生らで取り組むことにした。その間の教員の指導助言はないものとして、すべて学生らの判断で保育案を作成し、発表検討会を実施した。準備等における様々な制約があったことは評価者(本学教員を含む受講学生)も承知の上で、「子どもの実態」、「ねらい」、「ねらいと活動内容との整合性」、「子どもへの声かけ」といった視点に関する不十分さをあげるコメントのみならず、「活動内容に関する基礎理解の乏しさ(リサーチ不足)」の指摘などがいずれの発表の場面でも矢継ぎ早に出され、検討会はいつになく厳しい空気に包まれた。こうした経験を踏まえ、教員からは、4月着任以降の自らをイメージし、「設定保育(保育実践)力向上のための取り組み」を学内・学外(園現場)問わず、自主的に計画・実行する必要性を説いた。同時に、授業後の学生らの振り返り記述には多くの学生から「自らの思わぬ過信」や「現在の自分の能力状態(向上すべき課題を含む)」を確認することができ、そのことで現場経験(園での保育補助ボランティア等)における自分の目標が明確になったとの記述が確認された。資質向上の必要性を認識していたとしても、課題も含めた自己理解が不明確であれば、効果的な活動になりにくくなる。この点の補完を狙った授業上の工夫措置であった。

二点目は、実習の振り返りの「振り返り」を通して、子ども理解や保育者(業務)理解のために行う事例分析の視点を深めることである。幼児教育コースでは例年、幼稚園教育実習や保育実習の事後学修として、学生が実習園で経験した省察すべき事例を持ち寄り(研究上の倫理の遵守)、個々での分析後にグループでの検討結果を報告する会を催す。だが、こうした検討会で報告された分析の視点等に関して、さらなる深まりを追求する機会は存在しなかった。

そこで、科目「教育実習Ⅶ」等にて事例分析(エピソード記述)に関する講義・指導を行った教員(教

育心理学を専門)に依頼し、改めて事例分析の意義とその方法について、自らの保育実践を省察し高めていく実践理解の授業を設定した。当該授業では、事例分析に関する基礎理解の確認と同時に、子ども理解や保育者(業務)理解がさらに深まる応用的な見方や考え方が示された。この取り組みにより、学生らは既知内容の確認やあいまいな理解であった部分を補完することができるのと同時に、応用領域に触れることができる機会を得た。早速、在籍期間中に実施の現場経験にて活用するなど、着任後に向けた準備を具体的に進めていく姿が確認された。

そして三点目に、幼稚園教育実習や保育実習のみならず他の教育活動との連動性(構造化)の取り組みである。具体的には、各実習期において本科目を想起させる取り組み(例:4年次後期の構想)や声かけを通じた意識づけであり、他方で本科目において各実習を想起させる取り組み(実習記録の読み直し、過去の実習において分析した事例の再検討等)である。心血を注いで取り組んだ諸実習やその実習記録を活用し、学生らの資質向上につながるための授業内容上の工夫を試みた。最後に、教材上の工夫として、本科目関連で取り組んだ学修上の記録を一括し、授業毎に学生が個々に振り返ることができるように、各回をポートフォリオ形式にて集約できる手立てを今年度から始めたことも付記しておく。

### 3 成果と課題

今年度の成果として、「現場経験(実地調査、園での保育補助ボランティア等)の円滑実施」、「実習や従来学修の振り返りの具体的深化」、「社会性向上体験の充実」があげられる。いずれも、昨年度からの実施・反省に基づき、改善を試みた成果の兆しと捉えられる。

各実習終了後以降、着任を迎えるまでの間の学生らの現場経験の不十分さに少なからぬ懸念が示され、昨年来より各実習の事前事後指導や演習等は現場経験の必要性を伝えてきた。こうした成果は、昨年度との相違点として看守される。具体的には、学生らが現場経験に取り組むことへの戸惑いを吐露することが著しく減少したことである。園等への事前連絡やその後の対応について概ね取り組んでいたと認識できる根拠は、現場経験に関する問題等が確認されなかったためということになるが、関係教員による事前指導や相談の充実も少なくないだろう。また、教員による授業を、通常では見られないティーム・ティーチング的な形式で行ったり、関係教員同士による議論を示したりすることや、学修内容を基礎理解と応用理解に棲み分けることにより、学生それぞれが深化できたことが、授業シート(ポートフォリオ形式にて集約した資料)から読み取ることができる。また、外部講師(ゲストスピーカー)の招聘の際には、学生らによる運営を実施した。当該学生らの一部は、前年度にボランティア学生として参加しており、実情に関する一定の理解があった。学内にて多様な人々と触れ合い、会を自主的に運営していくことは、その計画構想段階から幼稚園・保育所等の園職員としての成長に連なる経験であっただろう。

最後に課題として、本科目と各実習ならびにその他の科目がより連動性を持ち、学生の専門職者養成に資する機能を有するための事前準備・工夫があげられる。また、当該の4年次生のみならず、学生らには適切な指導を行った後、できるだけ早い時期から現場経験を積める機会の拡充と現場で学ぶことの自明化の浸透を図っていくことも課題と捉えられる。

以上のような今年度の省察(成果と課題の検討)に基づき、次年度以降も教職・保育職を旨とする受講生にとって実りある学修になるための改善をさらに進めていきたい。

## 謝辞

今年度本科目を実施するにあたり、多大なるご支援ご尽力を賜った幼児教育コース卒業生有志、さらには心理学科、学園統括部地域連携室、そして初等教育学科幼児教育コース3年次生有志に謹んでお礼申し上げます。